

編集委員会幹事長

今橋 隆

IMAHASHI, Ryu

一般財団法人運輸政策研究機構運輸政策研究所首席研究員

1. タバコと列車の名前

わかりにくいタイトルで申し訳ないが、つづりはweekend, ouigoであって、読みはフランス語流である。前者は50年近く前に流行し、そして後者は現在、パリの街中など、主にフランス国内でよく使われているそうである。

惜しまれつつ早逝して20年以上たっても、根強い愛読者の多い作家である開高健は、エッセイの中でこのヴェキャンを紹介し、タバコ名の英語を、わざわざフランス語読みにするところがよろず一筋縄ではいかないパリジャンらしい、と評している。紫煙とともに開高大人は幽明境を異にし、さらに世紀が変わった今となっては、さしものパリの街角でも、喫煙している人をあまり目にしなくなった。もともと、「メグレ警部シリーズ」の登場人物がくゆらすジタンなど癖の強いフランスらしいタバコから、タール控えめ、ニコチン軽めの商品へと嗜好が移りゆくひとつの象徴が、ヴェキャン、という乾いた語感にあらわれている気もする。

ウイゴ、というのはフランスの高速鉄道がただいま売出し中の列車で、欧州を席卷しているLCC（低価格航空会社）への対抗措置であり、軽食堂車や車内改札といった付帯業務を省略して定員を増す一方、長距離バスを含めた代替的交通機関と競争的な運賃を設定して価格に敏感な層を誘引する試みである。言語として聞くと、フランス語のyesであるウイと、英語でならwe goになるという、一種の「掛け言葉」が工夫され、ひねりのきいた表現である。

2. 欧州放浪の思い出

考えてみると、この間を流れる約半世紀のうちに、欧州は社会主義国の崩壊に続く統合の深化という、2種類の根源的な変容を経験している。1980年に私が初めて訪欧した際、アンカレッジ経由でオルリー空港に到着して乗り換え、パリに滞在してからユーゴスラビアのリュブリアナにたどり着いた。欧州域内便に使われていた機材はジェット旅客機第1世代のB707で、単廊下、片側2列の座席配置が、今となっては懐かしい。パリのレストランで一晩だけの美食を楽しもうとしたけれど、何しろ貧乏学生ゆえ、懐具合からフランスワインは無理で、アルジェリア産のグラスワインで済ませたことを思い出す。

今ではユーゴという国それ自身が消滅してしまい、リュブリアナを中心とする地域はスロヴェニアという小国に衣替えしている。スロヴェニアやクロアチアといった中欧の小国ではもちろん、パリやストラスブールでさえ、英語はずいぶんと通用するようになってきた。世紀が変わるころにアジア経済危機を経験したタイや韓国についてもいえることとして、英語の浸透度は、市場社会への対峙におけるその国の真剣さを推測するひとつの指標ともなる。日本のように国内市場がかなりの大きさであるとした感度が鈍りがちだが、少子高齢社会はいうに及ばず、経済の規模を比較する対象として中国やインドを考えるなら、さまざまな面における内向きやガラパゴス化は衰退の象徴にはかならない。

それから6週間リュブリアナで過ごし（旅行会社のインターンシッ

プを経験しつつ、休みにはアドリア海沿岸などを訪れた）、あとは半月にわたりユーレイルパスで欧州を回ったのが、ある意味で運のつきかもしれない。公私含めるとその後訪欧は20回を超え、他にもニュージーランドに通算では6年在住して、現在に至っている。

3. 交通市場の変遷と眼前の仕事への取組み

社会主義の存在とそれに伴う東西の対立は、冷戦や民族間対立といった負の側面を伴いつつ、国民国家というアイデンティティの保持という面では、あるいは一種の保護的な機能を果たしたのかもしれない。日本の政治も東西冷戦の下で、(少なくとも表向きでは)保革の対決という、ある意味で分かりやすい構図を維持していた。

欧州の場合、そういった機能の衰弱あるいは消滅と対照的に、資本や労働を含めた市場統合が進行してきた。見逃せないことに、オランダや北欧諸国など、社会保障の先進国といわれる諸国でさえ、障壁の低下による統合の深化と費用効果的な社会保障の両立という難題に、それぞれ工夫しつつ、取り組んでいる。

このところ欧州は、リーマンショック以降の経済的な苦境を脱しきれず、次々と債務の重圧にさらされる諸国を生んでいる。もちろん、債務累積や財政破綻は憂慮すべきことであるが、2000年代の中盤まで、ギリシャやポルトガルといった、欧州における中小国の多くが、広域的な労働力の移動、観光収入の増加、農産物の販路拡大など、統合による果実を享受してきた経緯も、また否定しがたいところである。夏に歌い踊っていたギリギリは自助努力せよ、と叱咤するドイツなど勤勉を旨とし貯金箱扱いを嫌う諸国にしても、通貨統合がなければ自国通貨高に輸出の足を引っ張られ、労働力の移動を阻害する壁が高ければ労働市場の逼迫から賃金上昇に悩んでいたはずであり、緊縮財政などの諸条件をそれらの中小国に課しつつ、財布のひもを緩めざるを得ない立場にある。アイスランドに代表される金融立国の破綻や失業の増大といった負の要素は、すでに発現した統合によるメリットとの比較衡量を経たうえで、評価されるべきである。

同時に、交通市場の競争化は、TEEが疾駆し各国のフラッグキャリアーが群雄割拠していた1970年代とは様変わりした状況をもたらした。小国のキャリアーは他国にある大手の傘下に入ったり、消失したりという憂き目にあっている。高速鉄道の進展は日帰り旅行圏の拡大、都市の魅力向上といった成果をもたらす反面、LCCや長距離バスという低廉な旅行費用を旅客に訴求する交通手段への追い風ともなっている。TGVが本腰を入れてLCCへの対抗措置を講ずる所以であろう。殷鑑遠からず、学術雑誌も国際的視野での競争にさらされている。多言語の重視や文化相対主義という見地からは異論も出そうだが、さしあたり、誌面の水準を高めるための言語上の工夫は、英語を媒介してなされるのが捷徑である。英語による投稿を奨励するにとどまらず、「運輸政策研究」としては、査読プロセスや原稿の取り扱いをも含め、国際標準を念頭に置きつつ、品格と学識を兼備した対応を心がけていきたい。